

佐伯市戦後五十年史(一)

敗戦前後の佐伯

矢野 彌生

(会員 佐伯市中山区)

はじめに

戦後五十年の郷土佐伯市の歴史には、私たち自身が体験してきた、さまざまな思い出がつながっている。すなわち、私たち自身の「自分史」と重ねて考えることができる「現代史」である。それはもともと身近かな歴史であるかもしれない。

西洋のある歴史家が「歴史とは、現在と過去との対話である」といつているが、過去は過去なる故に問題になるのではなく、現在にとって問題になり、現在は過去との関係を通じて明らかになるのである。こんな観点から「佐伯市戦後五十年史」を数年かけてまとめてみようと思っている。

浅学非才の筆者には重い荷物になると思っているが、

あまり肩に力を入れずに、「わかりやすく」ということに力を注いで書いてみることにしたい。執筆にあたっては、主として佐伯の市政・産業・市民生活・教育・文化等の領域にわたって欲ばらずにその一端をまとめてみよう。さらに、記述には私見をさしはさむことは避けるよう努めてまとめたいと思っている。ただ、資料の取捨それ自体にすでに価値判断が入ることは避けられないが。しかし、現代史は歴史的な評価を下すには無理な点が多いので、あくまで過去の事実経過を客観的に記述していきたい。

一 敗戦への道のり

(一) 佐伯の本土決戦体制

人間魚雷 〈佐伯航空隊、特攻戦体に編入される〉

回天の基地 佐伯航空隊は、昭和二十年(一九四五)七月

第八特攻戦体に編入され、特攻艇回天の基地となった。爆弾か魚雷を背負った回天は米艦を求めて、艇もろとも体当りしたというが、市民は誰一人このことを知らなかった。

『激動二十年』²⁾は、佐伯の本土決戦体制の状況を次の

ように述べている。

入りくんだ県南の
リアス式海岸は、い
くつものほら穴が
掘つてある。その一
つから、トロツコに
のつかった異様なも
のが頭を出した。
レールのうえを勢よ
くすべり、海にぼつ
かり浮いた。波がた
ち、月影がくだけ

る。魚雷のようだが、中央部に潜望鏡がある。魚雷より
スマートにみえるハッチに人影がして「ただいまから訓
練を行ないます」と敬礼。波打ちぎわの人影も、これに
こたえて挙手。月夜の怪物はするすると進み、潜水しは
じめた。

怪物は人間魚雷”回天“これを見送つたのは第二十四
突撃隊、人よんで嵐部隊の隊長・小灘利夫海軍大佐であ
る。回天は長さ六・五メートル、直径一メートル、先端部に五百キの



第1図 大分県下の主な軍事基地
(['大分の空襲』による)

爆弾をつけ、潜望鏡でのぞきながら敵艦につつまむ一人
乗りの特殊潜航艇。佐伯湾内の大島には、商船がつかない
である。一発のえい光弾があがり、商船をあかあかと照
らし出した。回天は商船めがけて突進する。艇もろとも
の体当たり訓練だ。この訓練は夜を選んで、ひそかに続
けられた。

沖繩を占領した米軍は、九州のどこに上陸するのだろ
うか。日本軍部には二つの見方があった。一つは有明海
ぞいの西九州海岸線。もう一つは鹿児島・宮崎の海岸。
いくどか参謀会議が開かれたあげくの結論は――西九州
海岸は島が多い。島は
要塞化しやすく、上陸

地点に到達するまで
に、島からの攻撃をう
ける。これにくらべ、

鹿児島・宮崎海岸は島
がない。波も静か。上

陸は鹿児島・宮崎と断
定された。

佐伯に海軍防潜司令



佐伯飛行場掩体壕
(興人の入口にある・平成10年12月)

部ができる。米軍の上陸予想地点が決まると、宮崎県よりの県南地方には、米軍を水際でたたく布陣が、着々とかためられた。県南地方の軸になる佐伯には、海軍防潜司令部ができた。司令部の下には佐伯海軍航空隊・第十二航空廠（大分）補給基地・海軍施設部佐伯支部・佐伯防備隊が編入された。

防備隊副長と嵐部隊長をかねたのが小灘海軍大佐である。嵐部隊は、回天のほかには海竜・震洋を持っていた。海竜は飛行機のように両翼をつけ、これがカジの役目をする魚雷。震洋はベニヤ合板製のモーターボートで、砂糖にアリのがむらがるように、群をなして敵艦に体当たりするもの。いずれも「海の特攻機」だ。

隊員約七百人は、徳山の天津島で基礎訓練を受け、佐



鶴見崎の砲台跡（平成10年11月）

伯では、もっぱら実戦向きの訓練が行なわれた。小灘大佐によると、特攻兵器をかくすほら穴は大入島に二つ、鶴見町に三つ、米水津村に二つ、蒲江町に一つあった。佐伯湾には、米軍潜水艦の侵入を防ぐ防潜網が縦横にはりめぐらされ、佐伯―蒲江の海は機雷原。機雷には聴音機がとりつけられ、艦船のスクリューの音は、すぐ鶴来島・鶴見崎などの聴音所でキャッチ、ただちに迎え撃てるようになっていた。

日本の艦船の航路は佐伯寄りと四国寄りの二コースが決められ、これは極秘。また、佐伯の高台には高角砲三門、蛇崎山頂に同三門、そのふもとに十三センチ普通砲二門、野岡山頂に機銃二基、二十五センチ砲三基といったぐあい。鶴来島（宿毛市）など三カ所には、潜水艦をねらう十五センチ砲三門が、豊後水道をにらんでいた。

（制海権はアメリカににぎられていた）しかし、この水ももらさぬ布石は、あくまで敵の艦船をおびきよせて攻撃する水ぎわ作戦用。したがって、沿岸を少し遠ざかると、防備は手薄で、制海権はアメリカににぎられていた。

佐伯は輸送船の集結地で物資基地でもあった。佐伯で

物資を補給した輸送船は意気ようようと港を出て行くが、豊後水道をすぎると、もう敵の潜水艦につかまり、水没・破損。横つ腹に魚雷の穴を開けたまま、ほうほうの態で舞いもどった輸送船には、おびたらしい死傷者で、佐伯市の火葬場で処理できないこともあった。

佐伯航空隊は、もともと水上機部隊で、飛行場もせまく実戦にはあまり力とならなかつたらしい。予科練習生三万人で組織した第三陸戦も、武器らしい武器はもたず、手製の手りゅう弾や竹やりづくりに、あけくれているたようである。(第一図参照)。

〈追記〉 回天は日本特有の九三式魚雷(威力は英米のもの二倍以上)からヒントを得て、黒木博司・仁科関夫両中尉が考案した。一人乗りで、敵艦の舷側に体当たりする必殺兵器。十九年秋から終戦まで十数回出撃して、敵艦二十九隻をほうむった。

震洋は昭和二十年一月十日、フィリピンのリンガエン湾(ルソン島の中西部)に初出撃、沖縄戦には二百七十隻が動員された。

水上特攻兵器成功率は海竜・回天が三分の一、震洋が十分の一とみられていた。震洋の成功率が低いのは、ベ

ニヤ板の弱い艇で、流木一つ、小銃弾一発を受けても沈むうえ、多数の群をなしてつっ込み、どれかが命中すればよいという方法をとったためだ。このほか、伏竜とよぶ人間魚雷も考えられた。これは、機雷を抱いて敵の上陸用舟艇のコースにもぐり、頭上に来たら、体もろとも舟艇を爆破する。

敗戦前後の「戦争中の思い出」⁽⁹⁾として、敗戦前後の大入島の生活 大入島の状況について安藤ヤエ子は次のように証言している。

〈きびしかった食糧事情〉 私は昭和十九年四月、大入

島農協に入り配給係として大入島一円を(一部除く)

高山技術員と二人で廻っていました。当時食糧事情は

きびしく段々畠に麦・芋等を作っていました。反別

により供出をして食糧はぎりぎりの線でした。(肥料がなく、収穫が少ない)農家は定量の六〇ポカ七〇

ポ、転落農家・非農家と色々あり、小麦のフスマやタ

ンメン(ウドンの五糧ほど折れた物)、妊産婦には少

しばかりの特配がありました。どの家も都会から帰っ

た人達で一世帯にいく組も同居して、それはにぎやかで、又食糧には目を光らせていました。

集金も同時に行ないますが、働きに出て留守の家が多くても班長さんが一括に立て替えて下さり、班内は家族の様に、お互いを思いやり助け合い「勝つまでは」を合言葉に、しっかりと銃後を守っていました。

〈空から米軍の宣伝ビラ〉 春先の上天気の事でした。

高山さんと荒網代地区へ行く途中メボシの浜を歩いていた時（南小学校の前）空から黄色の紙キレが一面に落ちて来ました。私が拾って手に取って見ようとした時、高山さんが「これは宣伝ビラだ、こんな物を見ている所を憲兵に見つかったらつれて行かれるから見えないけな」と言いました。

手に取って見なくても足もとに一面に落ちています。こわい物見たさにたちどまり、便箋半分くらいに、片方の手首の所に手銃がかかっている、手銃は軍部で早く手銃をはずせと言うような事が書いていました。私は高山さんにアメリカ兵はなぜ日本語がこんなに上手に書けるんだろと言え、日本の捕虜が書いたんだろと言いました。佐伯航空隊の前で敵機がゆうゆうとこの様な行なうことに言葉もありませんでした。

それから間もなく石間地区からの帰りに丸新作業所の浜で、水兵さん達が一列に並んで見守っています。大量の木材をつみ上げ濠々たる煙、異臭が立ち異様なありさまで。引き返す事の出来ぬ一本道、私も若くはすかしさとおそろしさで走って通りました。後での話には海防艦が機銃掃射にやられ、戦死者がたくさん出てあそこで火葬していたと聞きました。負傷兵は石間小学校で手当をうけているとの事でした。

私の久保浦地区にも陸戦隊の兵隊さん方が家ごとに十名くらいずつ宿を取り、区長さんと本部で隊長さんやお医者様もおられ急病や子供の病気などを見てもらっていました。兵隊さん方は昼は山の中腹に壕を掘り杉山の中にバラックの兵舎や谷の近くに井戸を掘り食事の用意などをしていました。今思えばいいよ本土決戦にそなえていたのではないかと思われれます。

〈敗戦後の島民の生活〉 昭和二十年夏佐伯防備隊に空襲があり、黒煙を上げて建物が燃えています。二日も三日も消火しないのか、燃えてはくすぶりくすぶっては燃え上がり、まったく手つかずの光景に夕方農協からの帰りに守後の岡からながめ日本はどうなるのだから

うと立ちつくして見ていました。家に帰えると母から終戦した事を知らされ陸戦隊全員が神社に集まり隊長さんが其の様につけていたと聞かされあぜんとししました。

其夜班内全員子供から老人まで班長さんの家に集まりアメリカ兵がやって来る。男は労働力として働かせ、女はつれて行くからみんなそれぞれ逃げる様にと湯のみに酒を入れ一口ずつふくみ、これが別れになるやもしれぬとみんな泣きました。近日中に直川村赤木に行く事にきまり、男性と行きたくない人（子供も兵隊に行きどうせならこの地で死にたい）は村にのこり、村を守る事にきまり、村の奥の防空壕（地区全員が入れる大きな壕）に食糧をもって行く事になり、其夜母の帯の芯で大きなりユツクを縫い、身の廻りの品を入れ用意しました。其後行かなくてよい事になりほっとしました。

今思えばおかしな話に聞こえますが、終戦前後は大入島に電話は数台、公共機関とお医者様だけ。又ラジオは地区に一台それも雑音が多く聞き取りにくい物でした。島外との連絡は電報で、電報配達さんは夜、昼

となくいそがしく廻っていました。終戦後は食糧はますますきびしく、私もふかし芋三個ハンカチに包んで行き炭火であぶつての昼食でした。其後おさつに証紙をはったり新円きりかえ等インフレはますます加速して行きました。お洒落のしたい娘時代、食べ物も着ものもなく母の古着でブラウスを縫いモンペをはいて、やせこけて瞳だけ輝いていた青春でした（文中の見出しは筆者）。

(二) 始まった佐伯への空襲

最も悲惨だった 〈県下への空襲〉 昭和二十年に入

四月二十六日の空襲 ると大分県下の米軍による空襲も本

格的になった。それは大分航空隊（三月十八日）・日豊

線諸駅（三月十八・十九日）・宇佐航空隊（四月二十一

日）・佐伯航空隊（五月十三・十四日）に引き続いて、

沖繩戦争終了（四月一日沖繩本島に上陸、六月二十三日

守備隊全滅）後は一般市街地爆撃を受けた。さらに、七

月十七日の大分市の空襲では旧市街地はほぼ壊滅したのである。

また、七月二十五日午前十時ごろには保戸島国民学校

での直撃弾で多くの児童と教師が犠牲となった（児童一二五人、教師二人が死亡、児童六九人、教師六人が重軽傷を負った）。

県下の空襲は、じつに来襲回数二五〇回、来襲機数延べ七〇〇機、投下爆弾数約一六五〇発、焼い弾約九五〇〇発、全半焼五七七戸、全半壊七三三戸に達している。⁴⁴⁾

〈市民、四十六名が爆死〉 佐伯航空隊は、昭和十八年ごろから時たま米軍の空襲をうけていたが、二十年三ごろからB 29をはじめ、艦載機グラマンの来襲が激しくなった。

昭和二十年四月二十六日の小雨そは降る朝まだき、突如鳴り渡る空襲警報のサイレンに市民の夢は破られた。飛び起きて退避する暇もなく、たれこめた雨雲の中にB 29の編隊の



尊蔵地六霊慰死者爆
成平内・賢養寺境
(昭和二十年十一月)

爆音が雷鳴の如く響いてきた。すわ空襲だと思ふ間もなく、気味わるい耳をつんざくような金属性の響きがあると同時に、つげざまに投下されるものすごい爆弾の破裂音に耳をふさいだ。市民たちは恐ろしさにおののいて動けず、立ちすくむのみであった。

一度ならず二度、三度と波状爆撃をくりかえし、爆弾は市内の各所に投下された。

城山山頂の毛利神社は跡形もなく破壊され、佐伯中学校（現在の鶴城高校）の本館は半分がふっとび、馬場、西谷、白濁方面も被爆。最も悲惨であったのは馬場（現在の電信電話局の前）にあった防空壕に直撃弾が落下して、退避中の人達全員が即死したことであった。この日の空襲で市民四十六人が爆死している（『佐伯市史』）。

また、昭和三十一年に刊行された『佐伯駅四十年史』⁴⁵⁾には、二十年四月二十六日の空襲の状況について次のように伝えている。

〈佐伯駅最大の被害〉 佐伯駅最大の被害は、四月二十六日早朝のB 29の来攻であった。この日午前六時ごろ折り柄の小雨の空から投下された巨大な一弾は、駅前在美観を誇るミナト屋旅館を直撃した。一瞬旅館は真二つに

大破して見る影もなくなり、爆弾の破片は一団となって佐伯駅に襲いかかった。

一番真近な貨物室の窓ガラスは木葉微塵になり、室内にあった金庫に穴があき、壁や柱に無数の弾片が貫通するものすごさであった。つぎに駅長室の配電盤はメチャメチャに壊れ、出札室の切符箱はフツ飛んで切符がバラバラに飛び散るといふ騒ぎ。その他待合室、小荷物室、運転室なども同様に、土壁が落ち、板や柱に穴があくといふ散々な有様であった。

特に集札口上家の鉄柱は弾片のためその一部を欠ぎ取られ、いまもなお現状を留めている。幸いにも旅客、駅員共逸早く待避して死傷者はなかったが、貨物室南側の防空壕は七、八人が折り重って頭を突込み、全く生きた心地がなかったという。

同日午後四時ごろ、さきに駅裏平野に落下した時限爆弾が爆烈して民家を破壊し、その爆風は第二ホームを通行中の駅員一名を、線路の中に吹き落した。この日市内各所へ爆弾が投下され、西中区第一班の居住者数約三十名が馬場の松下の防空壕で爆死したのを最大に、郵便局及び中村地区に被害があった。

さらに、同年五月十三日には米軍機動部隊が九州沖に接近し、グラマンの攻撃により防備隊が全焼しており、終戦一日前の八月十四日には西谷にロケット弾一発が落下し、死者四名、負傷者七名の被害があった（『佐伯市史』）。

昭和二十年七月、大分市、別府市、佐伯市、中津市などの強制疎開が始まった。大

分市では大分駅前から本町、堀川町までの約千五百戸、金池、長浜、王子、勢家町などの一部が強制疎開の対象であった。中津市では九百二十三戸、別府市も駅前など強制疎開された。¹⁶⁾

佐伯市では駅前から始まって、大手前まで幅十五メートルの防空疎開が行なわれた。一週間前に通達を受けた市民は、「お国のために」という悲痛な掛け声で、わが家をロープで引き倒した。それだけではない。一般市民も敵機の焼い弾攻撃にそなえて、市内全域の学校や住宅の天井板のとりはずしという作業をやつてのけた。まるで気の狂つたような、悪夢のような毎日であった。（『佐伯市史』）。

(三) 学徒動員

佐伯中・佐伯 昭和十九年三月七日、政府は「決戦非高女の学徒動員 常措置要綱」にもとづいて「学徒動員実施要綱」を閣議決定した。勤労即教育として、通年動員をして生産にあてようというのである。

これまで、夏休みや農繁期に報国隊として農業生産に動員されていた中等学校生徒は軍需工場へ、中等学校下級生と国民学校高等科生徒は授業を停止し、勤労作業に従事するようになった。

佐伯中学校では高学年の生徒は、海崎の日本セメント佐伯工場と福岡市の昭和鉄工所に分かれて動員され、佐伯高等女学校でも、四年生は福岡へ、三年生は保土谷鉄工と海崎のセメント

第1表 学徒動員表

(佐伯市関係)

学校名	学年	人数	動員の期間	所在地	工場名	作業内容
佐伯中学校	4	150	19年9月~20年8月	福岡市海崎	昭和鉄工所	機関砲の弾丸
	4		19年9月~20年8月		浅野セメント	ボイラーの計測
	3		19年9月~20年8月		東九州造船所	木造船建造
佐伯高等女学校	4	150	19年10月~20年8月	福岡市	昭和鉄工所	飛行機部品製造
	3	150	19年10月~20年8月	野口	福岡精工所 保戸谷化学	工場建設

(大分県教育センター『研究紀要』第3集による・現地調査により一部改正)

トほかに毎日通って働いた。そのほかに海軍航空隊に出動して女鳥一帯に飛行機の掩体壕を建造したり、出征兵士や戦死者遺族の農家へ、農作業にかり出されていた(『佐伯市史』・第1表参照)。

古市区の江藤操は昭和十九年から二十年にかけて学徒の地元のてい身隊長として動員され、活躍した一人であるが、『古市の生活史』⁽⁷⁾の中で、当時の学徒動員の状況と古市の生活について次のように伝えている。

(前略) 娘ざかりの私達も銃後の戦士として、戦争に勝つまでは、勝つまでは、とそれを合言葉に、すごく張り切っておりました。

昭和十九年三月、県立佐伯高女卒の女子てい身隊第一期生として、卒業生約一〇〇名のうち三十数名が、



てい身隊が佐伯駅より出発 (『古市の生活史』より引用)

二班に別れ、福岡、小倉の軍需工場に向って、日の丸はち巻きをきりつとしめ、佐伯駅から出発して行きました。

「花も蕾の若桜、五尺の命引つさげて、国の大事に殉ずるは、我等学徒の面目と、ああ紅の血は燃ゆる」と学徒動員の歌を口ずさみながら生産戦士として張り切って出発したわけです。

私達十数名は、地元でい身隊として市内の工場、更に軍施設の航空隊、防備隊、軍需部等に分散配属されました。私の勤務する軍需部は、兵器、需品、燃料、食糧の戦争必需品を格納しておりました。

呉鎮管区情報がひっきりなしに、暗号で打電され、軍極秘書類を上司に届ける度に、緊迫した情勢をひしひしと感じ、心にゆとりのない毎日でした。

ついには、一日に何度も警戒警報、空襲警報のサイレンが、けたたましく鳴り響き、重要書類をいっぱい抱えて、防空壕にかけ込む毎日となりました。夜は、灯火管制がずーっと続き、電球に黒い袋をかぶせて、畳の上に照る僅かな光に、家族が肩を寄せ合って不安な日々を送りました。

一方、豊後水道を北上する米軍機は、基地の軍人、軍属を合わせると、三万人を超えたという古くからの海軍基地「佐伯」を、容赦なく攻撃して来ました。古市でも防空壕に走り込む回数が度重なって来ました。

二十年三月頃から米機B29の爆撃と艦載機グラマンの機銃掃射が、繰り返され古市もその掃射を、何度か受けた事がありました。

もっとも烈しかったのは、四月二十六日。早朝からB29の爆撃に見舞われ、馬場の松（現在のN T T付近）近くでは共同防空壕が直撃されて、避難中の女性や子供三十八人が、全滅しました。頭や手足のない遺体が、警防団員の手によって、善教寺の本堂や廊下に運び込まれ、御住職（桑門憲五）さんと正子夫人が、けなげに働いて下さり丁寧に処置して、一体ずつ棺に納め、御家族に引渡してあげた。という話が市内に広がりました。

そんな不安な或る朝、私は出勤して、防空頭巾も鉄兜も、はずす暇もなく、ドカンという大音響がしました。すばやく事務机の下にもぐり込みました。警報なしでだしぬけですから、もぐったもののガタガタと休

中がふるえ、もうだめだ。やられた、サーっと血の気の引くのを夢か、うつつか覚えていました。どやどや何か騒がしいのにフツと気がつく、隣接の防備隊兵舎が直撃を受けたとの事、それはそれは地獄の修羅場でした。

〔敗戦前の古市の生活〕 このような空襲の連続で、軍施設は兵隊、軍需物資、弾薬等を更に、急ぎ分散格納する為に、古市、八戸迫田（その当時は梅牟礼区といた）が協力する事になり、それぞれの納屋や倉には軍需物資がすき間なく詰め込まれ封印されました。我が家の倉でも勝手に開けられません。

非常に食糧難で副食物は何にも手に入らない時なのに、兵隊さんの食糧、日用品だけは豊富で、缶詰、砂糖、石鹼、タバコ等が、品目ごとに箱に詰められ、必要に応じて下士官が、倉から運んで行きました。喉から手が出る程欲しい物ばかりでした。

田の口の堤の上には、山を背にして兵舎が建ち、愛宕神社の腰や、八戸の奥にも兵舎が立ち並びました。空から分りにくいように杉の木の影等をうまく利用していたようです。堤の下には、海軍病院も出来傷病兵

は、疎開入院で治療を受けていました。軍医長（現在の西谷町谷口病院院長）が、馬に乗って古市病院と防備隊病院をかけ持ちで、バカバカと往復する姿はとても印象的でした。

白衣を着た兵隊さんが、堤の中にボートを浮かべ、療養の余暇を楽しむ姿も見られました。遠く離れた故郷を思い、家族をなつかしみ、さぞかし、望郷の念に胸を痛めた事でありましょう。

そして間数の多い家は、下士官以上を下宿させて疎開に協力しました。食事は隊内ですませ、夜ねるだけです、少尉以上の人には、従兵がついていて、ふとんの世話までしていました。

当時の古市は、まだ水道もなく、兵舎には梅牟礼溪谷から孟宗竹をつなぎ合わせて水を引き、溜め水をしたり、井戸を掘ったりして、それなりの対策が考えられていたようです。区内を流れる門前川は、水が豊富で美しく、魚やシジミ貝が住み、夏は特に子供達の大好きな遊び場でした。

夕方になると、門前川のカーブする、つくまわしや橋元で風呂代わりに、水をあびるフンドシ姿の兵隊さ

んが、いっぱいでも賑やかでした。

あの当時から四十七年、なつかしい思い出を綴る時、純情で精いっぱい生きた青春でした。楽しい事もいっぱいありました。つくづく思う事は「あんなひどい事が二度とあってはならない」「お国の為にしっかりと職場を守ります」と、地元でい身隊長として宣誓した私でしたが。……………（〽）の見出しは筆者）

当時、国民学校の児童も、上級生は食糧増産の一役をになつて勤勞奉仕に出場し、麦刈、いも植、田植、稲刈りと動員された。また、燃料不足を補うため、松やにとりに毎日松山に通うなど動員された。

大分県下での終戦時の学徒動員数は、男子が県内六千二百三十一人、県外九百四十五人、女子が県内五千九百七十三人、県外二千三百八十八人であった。このほか、大分経済専門学校、大分師範学校をはじめ、私立の各女学校生徒も学徒動員された（『大分の歴史』第9巻）。

この学徒動員は、県下で約四〇名のいたましい犠牲者を出している。大分市の海軍第一二航空廠は、大分市、別府市をはじめ県下各地の中学校の生徒が多数動員されていたところであるが、その航空廠において、アメリカ

軍機の投下した爆弾の直撃を受けて殉職した大分中学校生徒一八名はわけても悲惨であった。⁽⁸⁾

当時、昭和十四年（一九三九）に公布された国民徴用令によつて、軍需工業の労働力を確保するために、中学校以上の学徒（全国で三〇〇万人）、未婚女性を中心とする女子挺身隊（四七万人）、強制連行の朝鮮人・中国人（七〇万人）といった人びとが軍需品の生産に動員された。⁽⁹⁾（以下次号）

【注】

- (1) 『佐伯市史』（佐伯市 昭和四十九年）
- (2) 柳本 見一『激動二十年—大分県の戦後史—』（毎日新聞 西部本社 昭和四十年）
- (3) 安藤ヤエ子『戦争中の思い出』（佐伯市平和祈念文集）平成九年）
- (4) 『大分県の百年』（大分県 昭和四十四年）
- (5) 小手川偉平『佐伯駅四十年史』（佐伯駅 昭和三十一年）
- (6) 佐藤 節『太平洋戦争』（『大分の歴史』第9巻 大分合同新聞社 昭和五十四年）
- (7) 江藤 操『太平洋戦争中の佐伯市と古市』（『古市の生活史』古市歴史研究会 平成五年）
- (8) 『大分県教育百年史』第2巻（大分県教育委員会 昭和五十一年）
- (9) 家永三郎・黒羽清隆『新講日本史』（三省堂 昭和四十二年）